

# 遺跡から出土するオシラ神類似の木偶

大 湯 卓 二（青森県埋蔵文化財調査センター）

## 1. はじめに

東北地方特有の民俗神とされるオシラ神は、オシラサマ、オヒラサマ、シラガミサマ、十六善神、カンノキジンジョ、オシラ仏、ペロペロノカギ、カバカワボトケ、オコナイサマ、オクナイサマ、オシンメイサマなど地域によって異なる呼称を有し、桑や竹などの材質の違いもあるが、長さ三〇cm前後の棒状の神体で、上からオセンダクと呼ぶ布切れが被せられ、手に持って回すことができる男女一対の木偶である。

本稿は、信仰伝承を主な資料とするオシラ神研究のなかで「モノの視点」からオシラ神に接近し、「遺跡から出土するオシラ神」とその周辺について報告するものである。

## 2. 形態論的視点から見たオシラ神研究略史

オシラ神の論文は、明治27年、遠野出身の人類学者伊能嘉矩が「奥州地方に於いて尊信せらるゝオシラ神に就きて」（『東京人類学雑誌』第9巻98号）が初出とされる。

伊能は、オシラ神についてアイヌ民族の信仰が蝦夷に残された遺風と推論したのであるが、考古上注目すべき点は、彼が図示した第一図から第三図に至る形態上の変化（第1図）を三段階に分類し、素朴な木片の神体から目、鼻、口を表現した具象的神体への発達、そして烏帽子、髭を描くまでの人面の変化を文化的影響という段階に沿って進化したものと類推したことにある。

その3年後、姉崎正治の「論説 中奥の民間信仰」（『哲学雑誌』第12巻第130号 1897）には、オシラ神の収納されていた箱から「阿遮羅神」の神札を発見し、眼前の共伴事実からオシラ神信仰の起源を不動明王の変容と解釈した。姉崎による仏教から変容したとするオシラ神の認識はおそらく事実と反するであろう。

初期の2人の論文には、モノつまり形態の類似やオシラ神との共伴関係の事象からオシラ神の起源を考える材料の一つとしたことにある。

昭和3年、喜田貞吉は「オシラ神に関する二、三の憶測」（上）、（下）（『東北文化研究』第1巻第2号、第1巻3号）、翌年（昭和4年）の「オシラ神の形態に関する憶説」（第2巻3号）のなかで「今此のオシラ神に対する行事を見るに、毎年イタコを請して新しくオセンダクをお着せ申し、それがあまりに数多くなれば古きを除くというところ、まったく同一の意義において行われるものと考えられる。アイヌのイナオの一種なるチセイコロカムイにしても、毎年新しくイナオを加え、数重なれば古きを除くというところ、また同一の意義のものと考えられる」と説明している。

喜田は、アイヌの宅神とオシラ神の習俗とを関連させ、オシラ神はアイヌの宅神（チセイコロカムイ・第2図）を起源とするものと類推し、イナオをオシラ神に着せる布切れ（オセンダク）であると考えた。

喜田が、このような解釈するに至ったのは、アイヌのチセイコロカムイとオシラ神の形態の類似と家の神であるという共通性、またイナオとオセンダク（布切れ）が共に神体に付着させるという習俗

から推論したのである。

形態の類似が、有力な起源を明らかにする材料として利用され、その延長上にオシラ神の本質を見抜く手法は考古学の型式学的方法とよく似ている。

喜田の「オシラ神の形態に関する憶測」を掲載した同誌上には、山本鹿洲による「白神資料聚記」(第二卷第三号)が発表され、岩手県上閉伊郡甲子村、釜石、鵜住地域を中心としたオシラ神信仰の実態調査がある。山本の調査の特徴は、聞き書きと共に形態的特徴を絵(スケッチ)に描き、さらに「立体白神像表」の分類にある。表の記載には、オシラ神の頭部を烏帽子、頭巾、女体、円頭、ビリケン、長頭、ホテイ、馬頭、顔隠、人象の種目に分け、地域ごとの所有数を集計している。しかし、半神像、ホテイ(布袋)という神体は、棒状の形状を特徴とするオシラ神とは、形態においてまったく異なる系譜にあるが、オシラ神信仰の一類型として忠実に報告している。また、顔隠の表記は、今日のオシラ神の形態分類である包頭型オシラ神を示すものであろう。さらに、絵像として用いているオシラ神も一覧表に纏められ、阿弥陀如来、観音、太子十六歳像、青面金剛(庚申)、不動尊、三宝荒神、太子馬上象、オコナイ、俗体に細別している。

これらの資料からの暗示は、オシラ神と称する画像が仏教や聖徳太子信仰そしてマイリノホトケ信仰とオシラ信仰が混淆し、シンクレティズム化していることが読み取れる。

山本は、昭和5年同誌『東北文化研究』第2巻第4号「オシラサマの研究(上)」のオシラサマの起源について、喜田のアイヌのイナオ説を否定し、顔隠つまり包頭型のオシラ神を古態とし、神社において使用する小麻幣のように多く其頭部を唐傘の頭を包んだ梵天幣というものがオシラ神の原型であると推論した。

オシラ神研究者の一人である佐々木喜善は、『遠野物語』の語り部として知られているが「おしら神異聞」(『土俗と伝説』第1巻第1号 1918)で興味ある見解を提示する。

「オシラ神は、狩人(マタギ)の尊拝する神で、マタギの秘密道具の一つにオシラサマがある。おしらさまを手にとっておがむべし、其の向きたる方角に必ずえものありという口伝があるという。また、遠野の土淵村ではおしらさまを鉤仏(かぎほとけ)と云っている。正月十六日のおしら遊びの日に、年中の吉凶善悪を占う。丁度こどものペロペロのかぎの様にして行ふ。」そして「私は按ずるに、この鉤仏(馬面の形は恰も鉤形也)というのは非常におもしろい発見だと思います。」と述べている。

佐々木のオシラ神を鉤仏といい、その形態が馬の顔部を鉤形のように作る点を強調し、棒の部分を手で回して占いとして用いる民間習俗との関連性を紹介し、形態から見た機能と習俗とを適合させてオシラ神の原初的機能を考えたのである。

金田一京助は、「蝦夷とシラ神」(『民俗』1ノ1 1929)のなかでアイヌ起源論について、現在アイヌにはこのような信仰がないことを指摘し否定的な見解を示した。

一方、金田一は、昭和8年「オシラ様考—馬鳴像から馬頭娘及び御ひらさまへ—」(民俗学5-11)を「関東のオシラ様」のタイトルで執筆し、オシラ神の成立について、異なる視点から論述している。

内容は、養蚕神とされるオシラ神を関東の蚕神の図像三、四十幅から比較、解析し、「馬鳴菩薩」がオシラ神の系譜にあること、そして図像から馬鳴菩薩の変化の過程や伝播の系統性について論じた。

だが、金田一の科学的な図像分析による考察であったが、そもそもオシラ神は絵像ではなく木偶であるのが特徴で、さらにオシラ神は東北地方では必ずしも蚕神と見なされていない点など、オシラ神

信仰の形態と性格に大きな食い違いが見られる。金田一の筆者の関心は、馬鳴菩薩とオシラ神の考察にあるのではなく、金田一が図像分析を対象とした絵像の変化から系譜を実証した研究方法にある。

民具の視点からオシラ神の解明を試みたのが、渋沢敬三等による『おしらさま図録』（日本常民文化研究所編 1943）である。

図録は主に岩手県から収集した40体のオシラ神を精査し、包頭形、貫頭形、顔の形態を馬頭、僧形、男神、女神、芯木の材料、オシラ神に着せられた染料の分類と衣類の変化、オシラ神に墨書された記録等、オシラ神の神体から解剖し、付随する情報を総合的に調査したのである。

しかし、オシラ神の本質的な考察を加えて来たのが、柳田国男である。柳田は昭和3年1月「人形舞はし雑考」（文藝春秋六卷九号）、同年4月「オシラ神の話」（文藝春秋六卷九号）、昭和4年「人形とオシラ神」（民俗芸術二卷四号）、昭和6年「鉤占から児童遊戯へ」（民俗芸術4巻4号）そして昭和26年、これまでの論考を整理し「大白神考」としてまとめ、その「おしら神と執り物」のなかで「オシラ神は古くは家の祭りを行う際、女性である祭主が神霊を迎えるための執り物つまり二本の木の用具に他ならない」と解説した。柳田は、すでに昭和4年の「人形とオシラ神」のなかで喜田貞吉の唱えるアイヌ起源論を否定し、オシラ神は日本固有の信仰と考えた。

柳田以後のオシラ神研究は、東北大学石津照璽を中心として昭和26年～31年に渡り東北地方の各県のオシラサマ信仰の調査を実施し、その報告が『東北文化研究室紀要』第3集（1961）にまとめられる。その調査を敷衍させた東北大学の楠政弘は、青森県下北地方全域のオシラ神の悉皆調査を試み、その成果を『下北の宗教』（1968）として刊行する。しかし 楠のオシラ神調査は、実態を通しての信仰現象の分析を重視し、従来の起源論に固執したものではなかった。

また、昭和40年、岩手県教育委員会社会教育課による先見的なオシラ神調査は、県域を対象として名称、数、材質、形式（貫頭型、包頭型、馬頭、円頭）、祭祀の方法など11の調査項目を設定し、各市町村の調査員から調査票を収集した。昭和50年代には岩手県立博物館がオシラ神調査を断続的に実施し、県域のデータを収集する。そのような一連の調査の成果は『いわてオシラサマ探訪』（岩手県立博物館 2008）として近年刊行され、県域のオシラ神のデータが余すことなくまとめられている。

楠以後のオシラ神の調査は、各市町村による悉皆的な立場で資料の収集を行う方向となり、特に、オシラ神の信仰伝承のデータは基より写真の掲載及び数量、寸法、材質、形式、分布が採集項目として取り入れられるようになる。

昭和47年三崎一夫は宮城県北部沿岸地方を中心に悉皆調査を実施し『図録陸前のオシラサマ』（1972）を刊行する。内容は、分布、呼称、オシラサマの形態（形態・大きさ・材料・着物・記銘・掛軸・箱の中の収納物）、祭日、祭祀集団、供物、オシラサマアソバセ、由来・霊験譚、オシラサマに類似する信仰、巫女とオシラサマ、オシラサマの家ごとの事例そして最後に附録として昭和47年までの詳細な文献目録（夏掘謹二郎編集）を載せている。

三崎の『図録陸前のオシラサマ』は完璧なほど必要なデータ（74件）を漏らさず分析された総合的な研究報告である点に驚かされる。なかでも一点ずつ写真を掲載しているのも重要である。

このような地域の悉皆調査の実施に伴い『いちのへのオシラサマ』（一戸町教育委員会 1986）、『軽米町のおしらさま』（軽米町教育委員会1988）、『陸前高田のオシラサマ』（陸前高田博物館1990）など、オシラ神の地域の報告が次々と刊行され、青森県では昭和55年・平成3年の2度の調査による十和田

市域を対象とした『おしらさま一総集編一』（十和田市教育委員会・十和田市文化財保護協会 1991）が刊行し、地域の信仰実態と形態的特徴をまとめ、さらに、『十和田湖町史』（2004）では十和田市地域の周縁としてのオシラ神の実態を報告している。

しかし、オシラ神信仰研究が地域の個別のデータを総合的に分析し、資料として扱う傾向にあるなか、形態論から提供される情報は十分に生かされなかった。その背景には、オシラ神信仰が現在もお生きており、所有者の眼前でオシラ神の包衣をはぎ取り神体を覗く調査に難しさがあった。もう一つには、東北全体を通しての形態変化を比較検討するという方法がとられず、地方的な特色だけで論じることが多かったため、系統的な系譜や分類が展開しなかった。

最近、『津軽車力 高山稲荷神社の民間信仰品』（弘前大学人文学部文化財論ゼミナール 2004）を表題にもつ報告書が刊行された。内容は津軽地方の高山稲荷神社に納められた棟札・社・神仏像・鏡・銭・木札・神棚を物質文化の視点から写真、実測図によってまとめたものである。資料には10体のオシラ神の神体が掲載され、編集者の関根達人は「オシラサマ研究の新視点と方法」と題し「今後オシラサマ研究を進める為には、ご神体そのものの型式編年の整備と、オセンダクの分析が重要になろう。異形のものも含め、多様性があきらかになりつつあるオシラサマのご神体を類型化し、紀年銘資料を指標として、その型式変化を明らかにする」ということを提言している。

考古学における型式論が、オシラ神研究の進展上、大きな可能性を有し、時間軸のなかでの変化の視点をどう捉え直すかという問題は再検討して行く必要がある。

特に、東北地方におけるオシラ神の形態論を地方的な特色だけに目を向けず、東北全体的の細やかな比較から体系化し、オシラ神の製作年代と地域性を勘案した歴史的分析方法が今後の課題となろう。

### 3. 遺跡から出土するオシラ神類似の木偶の事例

遺跡のなかのオシラ神類似の木偶は、いわば使用年代がある程度特定出来、当時の歴史的環境のなかでの位置づけも可能となる。遺跡から出土するオシラ神類似の木偶がオシラ神と簡単に判別できるものではないという点も考慮されるが、今後の検討資料として以下の事例を報告する。

分析する資料は、7 遺跡 7 点の木偶である。これまでオシラ神の神体を遺跡から紹介する例は少なかった。オシラ神の神体が木質であるということもあり、土中に残されることが難しいということもある。また、屋内で信仰対象とされた信仰民具であるから屋外で廃棄される現象も通常の状態とは考えにくい。ただ、オシラ神の話のなかに、家の者をあまり咎める神なので、真の神か否かを質すためと称して川に捨てるという伝承を各地で聞くことが出来る。

遺跡から出土するオシラ神から想定されることは3点上げられる。1 点は、遺跡のなかのオシラ神の使用年代とその時代のオシラ神の形態的特徴を知ることが出来る。2 点は、遺跡の歴史的環境から類推してのオシラ神の性格である。3 点はオシラ神の出土状況から読み取れる廃棄行為のなかの心意である。

以上の観点から報告するが、7 点の木偶は、本来一対であるはずのオシラ神であるが、遺跡からはすべて1 体だけの出土である。

(1) 福島県桑折町「土井ノ内遺跡」出土の棒状の人形（おしんめい様）（『桑折町埋蔵文化財報告書10』桑折町教育委員会 1993）（第3図）



井戸から出土した木偶は、長さ16.7cm、最大径1.3cmの棒状である。頭部の上は折り烏帽子、そして目鼻口を彫り込んで描き、墨を入れている。本体は面取り状に削られており、出土時には、下部に竹筒がソケット状に装着されていたことから、本体部分は竹筒に入っていた可能性が高いと報告している。

土井ノ内遺跡は、鎌倉時代後半頃から南北朝期、室町時代中頃にかけての遺跡で天然の地形を利用した建物跡を構築している。

歴史的には、Ⅰ期からⅢ期の三段階に推移している。

Ⅰ期（13世紀中葉から後半代）では、建物跡が少なく屋敷と呼べるほどではない。

Ⅱ期（14世紀前半から中葉頃）では、主屋の規模拡大と、母屋周辺に隷属身分者が居住したと思われる小規模建物跡が出現する。

Ⅲ期（14世紀後半から15世紀中頃）では、主屋や副屋の規模が前段階より拡大し、建物配置も整ってくる。この段階から主体部を掘を隔て、小規模建物群が形成され、屋敷主体部からの隷属身分との隔離を図ったとし、最終期には主体部副屋の拡散と規模縮小化が認められる。

遺跡の特質として、地形的に可耕地には限界があり、耕地を営むための水量の確保にも不利な環境とされるなかでの家産経営と段階的な小領主的な階層分化があったと見る。その家産経営の原動力の背景には、隷属的な階層者の使役によって成りたっていたと考察している。

オシラ神は、第Ⅲ段階（14世紀後半～15世紀中頃）のⅢ－Ⅰ期の第3号井戸から出土した。従って、14世紀後半～15世紀中頃のもものとされる。現存するオシラ神のなかでは最も古い年代を示している。

福島県の民間習俗としてのオシラ神について述べると、その呼称は、オシンメイサマ、オヒメサマと呼ばれ、県内全域に分布する。神体の形状は、長さ20cm～30cmほどの木又は竹を材料とする棒状のもので、男神、女神をシンボライズし目、鼻を刻み顔を作り、細長い布切れを幾重にも括り着けているのが一般的である。包頭型もみられるが、多くは顔を露出する貫頭型である。

オシンメイサマの管理者は、シンメイミコと称する巫女の管理に属し、伊勢、白山、熊野などの種類があるとされるが、本質的差異は認められない。オシンメイサマは、歩き巫女により特定の家に伝えられ、祀られて家の神としての性格が見られる。また、神職の家に継承された例、信仰の熱心な家に譲り渡された例もある。オシンメイサマの機能としては、神棚において祀るだけでなく、オシンメイサマの祭日のほか家々を廻り、請われれば神を憑依させて占い、治療などを行う。（小澤弘道「オシンメイ様信仰」『東北のオシラ神信仰』第28回東北民俗学合同研究会レジュメ 2010）

土井ノ内遺跡出土のおしんめい様（オシラ神）が、どのような祭祀を見せていたか。上記のオシンメイサマ信仰から想像するよりほかないが、報告書の考察によれば隷属的存在のなかに同族的血縁者としての農民の存在を指摘しているので、同族的祭祀としてオシラ神を用いた可能性がある。また、修験者が持ち込んだ可能性もある。竹筒に入れ込んだオシラ神を保管していたとすれば、収納というよりも背負って運ぶための竹筒であった可能性は考えられるであろう。遺跡からは他の宗教的遺物が確認されていない。

（2）福島県三春町「三春城下近世追手門前通遺跡群E地点」出土の木製人形（おしんめい様）（『三春町文化財調査報告書』第28号（三春町教育委員会 2003）（第4図）

オシラ神は、三春町城下町の三春城の郭内となる追手前地区と町人地（大町）を分ける堀跡周囲の

調査の際、堀跡と追手前側の土塁等整地層と町屋跡を分ける堀跡から出土した。出土層位はVIL区のIV層からの出土で、包含されている遺物は初期伊万里、中国産染付、瀬戸美濃の織部など17世紀中葉主体に17後半までの遺物が集中する。このことから、オシラ神（報告書ではオシンメイサマ）の使用時期を17世紀頃と判断し、この地区は、江戸中期以降の有力町人の屋敷跡と推定する。（平田禎文氏のご教示）

報告書の記載には、木製品の人形として表記しているが、備考にはおしんめい様としている。

木偶の長さ27.9cm、径1.85～2.2cmで、棒を丸く削り、上部に首、下部陽物風に削出し、中央がやや下曲がりとなり上・下部の向きがずれている。

オシラ神は、町人屋敷跡からの出土であるが、家の祭祀であったものか、修験、巫女が所持し廃棄したものかどうかかわからない。神体は、頭部の一部が破損し、包頭型か貫頭型は判断されにくいだが、頭部を彫刻している点に注意される。木偶の形状下部には、一巡する刻みを入れているが、これが何を意味しているか不明である。青森県のオシラ神の神本の下端に横一又は二の刻みを有し、包衣を被せている包頭型の場合は男女の別、前後の区別をする事例は多いが、一巡することはない。また、下端を陽物状に作出する意図は何か。平川南は「道祖神信仰の源流－古代の祭祀と陽物形木製品から－」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第133号 2008）のなかで古代の男根状木製品が疫神、悪霊の防災の呪具として用いられたとしており、木偶にも同様の機能を付与していたのであろうか。オシラ神は男女一対を単位とするなら男性を表現したことになろう。

### (3) 秋田市「東根小屋町遺跡」出土の木偶（『東根小屋町遺跡』秋田県教育委員会 2005）（第5図）

遺跡は、秋田市街地の中心部、久保田城跡の外堀から南側に位置し、江戸時代は城下町内（侍町）として町割された武家屋敷跡である。木偶は性格不明の遺構から出土している。

木偶の長さは下端部が折損しているが、現存する長さは18.85cmで、厚さ0.7cm～1.75cmである。形態は、棒状で頭部は目、鼻、口を彫り込んでいる。首部も彫り込んでいる。

木偶の長さは、下端が折損しているが実際は20cm～30cmほどであろう。径は2cm内外で手に持つのに都合がよい一般的なオシラ神の太さである。顔部は単なる棒状ではなく、顔を削作し、男女どちらかを意図したと思われるがその判断は難しい。形態と寸法からオシラ神と類似する。

### (4) 北海道上ノ国町「上之国勝山館跡」出土の人形（『上ノ国町上之国勝山館跡XⅡ』上ノ国町教育委員会 1991）（第6図）

勝山館は、15世紀末～16世紀末まで利用された巨大な館である。館の広さが3万平方メートルを有する二重空壕から構成され、侍屋敷と商工人を含んだ政治・軍事・北方交易としての巨大な館跡である。（国指定史跡）当遺跡から出土する遺物の量は膨大で15万点を超え、蝦夷交易・北はサハリンを含む日本海交易の拠点として繁栄した。

人形(木偶)は、勝山館の空壕から柱、桎、刺突具、鏃、矢柄、鞘、羽子板状木製品、曲物、折敷、漆椀、漆皿、下駄、木簡、しゃもじ、駒、茶臼、砥石、埴塙などと共に出土した。

人形と分類している木偶は、長さ31.1cmの丸棒状で、径1.6～1.7cmで、下端は丸味をもっている。頭の頂部は突起状で墨を塗っている。顔は目、鼻、口を彫り込み、首の部分を細く彫り込み頭部と胸を区画している。棒状の首部及び胸部に当たる位置にほぼ一巡する彫り込みを有し、其の下部は一段と細く削り込んでいる。

人形は、棒状の木偶で太さも手に持ちやすい大きさを民俗神としてのオシラ神と変わらない。ただ、首下及び胸部に一巡する彫り込みの意図はよく分からない。男女一対のオシラ神に対し、一体で出土する点は、土井ノ内遺跡と同じ状況にある。人形がオシラ神であるとすれば、2点の問題が指摘される。第1点は、北海道という異民族地域でのオシラ神の出現という問題、第2点として15世紀末～16世紀の製作とするなら年代が古過ぎる。民俗神であるオシラ神が、館内の居住地で用いられたとするなら、可能性として修験のような内地渡来の宗教者が祭具として持ち込んだ可能性は考えられる。和人中心の広大な館のなかにアイヌ民族も居住していたらしいが、アイヌ民族の製作物とすることも考えにくい。宗教遺物を否定することも可能であるが、形態からオシラ神と類似する木偶である。

(5) 岩手県平泉町「柳之御所遺跡」出土の木偶（『平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡 ー第47・48号・49次発掘調査概報ー』 岩手県教育委員会 1988）（第7図）

世界遺産を目指している平泉町柳之御所の遺構群の発掘調査で出土した。木偶は、12世紀頃の土抗から出土した。木偶は、烏帽子を被った人形で、長さが現存部6.5cmという小型である。下部が不明で、オシラ神と判断されるものではないが、オシラ神の関連資料として紹介する。

オシラ神と類似するとすれば最古のものとなるが、烏帽子を被っている型は、現存するオシラ神にも多く見いだせる要素で、しかも造りが厚さ1.8cmという点でもオシラ神一般の計測値に近い。ただ、棒状であったかどうかで問題で、首から下半分が欠落しており不明である。残存する首部下に貫通する横穴がみられることから、操り人形として用いた傀儡である可能性が高い。この時代の漂泊白芸人が持ち歩いたものであろうか。

(6) 青森県五所川原市「十三盛遺跡」出土の木偶（平成21年度青森県埋蔵文化財調査センターの発掘調査で出土。現在整理中である。）（写真1）

十三盛遺跡は、五所川原市の北部の岩木川と十川に挟まれた水田地帯に位置する平安時代の集落と接する溝跡から大量の木製品が出土した。木偶はそのなかから出土したもので、形態は長さ13cmと短いが、太さは径2cmほどで、手に持ちやすい。頭部の頂点は三角形の尖りを見せ烏帽子風で、目、鼻、口、眉を彫り込んで顔を現している。頭部下半から完全な棒状で材質はヒバである。

(7) 宮城県多賀城市「市川橋遺跡」出土の木偶（おしらさま）（『多賀城市文化財調査報告書』第75集 多賀城市教育委員会 2004）（第8図）

多賀城跡の南西部を流れる旧砂押川跡から出土した木偶である。顔は烏帽子を被った男形で首下からは手に持ちやすい棒状である。長さは9.5cm、幅1.7cm、軸径1.1cmでやや短くて細い。胴部には薄く二の字のような彫りが見える。烏帽子は墨で塗られたものであろうか。木偶は、おしらさまと思われるが、多賀城周辺では現在オシラ神信仰は聞かれない。また、旧河川跡からの出土で、川に捨てられたものであろうか。烏帽子型である点は特徴の一つであるが製作年代は不明である。

#### 4. 結びにかえて

遺跡から出土したオシラ神に類似する木偶は、7点と少ない。そのなかでオシラ神の系譜として判断されるのは事例(1)～(3)及び(7)の木偶で(1)福島県桑折町土井ノ内遺跡出土の棒状人形、(2)三春町三春城下追手門出土の木製人形、(3)秋田市東根小屋町遺跡出土の木偶、(7)多賀城市市川橋遺跡出土の木偶4点である。事例(4)上之国勝山館跡出土の木偶は、15世紀～16世紀末頃のオシラ神

に類似するが、事実とすると北海道では最古となる。

松前地方の事を著した『東海参譚』（著者不明 1805～1806）という書物には「桑の木の尺余なる男女2体のオシラ神を巫女が持って神を降ろして占いをする」という記事が見られる。（金田一京助「蝦夷とシラ神」）しかし、この頃は、勝山館出土の木偶の年代からすでに300年以上も後の和人中心の生活地域での記事である。上之国勝山館出土の木偶は、アイヌ民族の信仰民具でないとすれば、当時オシラ神の保持者は修験のような宗教者が持ち込んだものとも考えられるが、少なくとも勝山館以後のオシラ神信仰がこの地で継承されて来たという事実は確認できないのである。

事例(5)・(6)は、時期が平安時代の木偶である。(5)については、形が棒状というよりも人形型で、烏帽子を被ったように見える。首のあたりに貫通する横穴があり、胴部下半は見られないが、操り人形として用いたものであろうか。(6)は、顔がへら状で、そこに目鼻口をしっかりと刻んでいる。(5)・(6)は、平安時代の木偶であるが、オシラ神と判断するのは難しい。

オシラ神の形態的な視点からの問題は、オシラ神は本来棒状の神体に幾重にも重ねた包衣が着せられているのが特徴であるが、出土した木偶から布切れは残っていない。従って包頭型か貫頭型かは判断は難しい。ただ、貫頭型の場合は、顔を露出して馬・姫、男・女の形を拵えるのが一般的である。特に馬と姫の顔は、津軽、南部のイタコの祭文・「馬娘婚姻譚」のモチーフと関連する。「馬娘婚姻譚」の話は『遠野物語』のなかでよく知られ、その原書は4世紀の初め頃に中国の民間説話をまとめた「搜神記」（今野圓輔『馬娘婚姻譚』1966）という書物のなかにある。それが日本に伝播するなかで巫女の語るオシラ祭文に残された。オシラ神の神体が桑の木を選び、馬・姫の顔を拵えるのは、この話の由来譚から来ているとされる。

現存するオシラ神の製作方法は、刃物で彫り込んで顔を作る方法と墨で顔を描く場合とがある。一方、顔をまったく描かない唯の棒状に加工し包衣を着せてオシラ神とする例も見られる。

問題は、出土したオシラ神類似の木偶のなかに馬の顔が素描されず、すべてが人頭型の出土である。そのなかで福島県土井ノ内遺跡出土の木偶は14世紀後半～15世紀中頃と推定され、現存するオシラ神のなかでは最も古いことになる。つまり、南北朝時代から室町時代にかけてのオシラ神では、馬頭型は作られていなかったのであろうか。また、(1)・(7)のような烏帽子風の人頭型の出土を考えると、事例(5)のような漂泊芸人が持ち歩く傀儡の系譜を想定することも強ち無謀ではないように思われる。想像として熊野修験のような宗教者が神仏の唱道の必要から伝統の傀儡人形と『搜神記』からの「馬娘婚姻譚」の話を取り入れ習合させ、オシラ神信仰を流布したとする考えも想定されるのではないか。土井ノ内遺跡のオシラ神は、筒の中に神体が挿入されていたらしいから宗教者が背負って持ち運んだ可能性を窺わせる。

実際、紀年銘のあるオシラ神を見ると、岩手県九戸郡種市町の大永5年（1525）の包頭型オシラ神は男女人頭型の形態である。天文10年（1541）の大船渡市の貫頭型のオシラ神の1体は馬頭である。

二戸市永禄9年（1566）の包頭型の1体は馬頭である。天正15年（1587）の陸前高田市のオシラ神は、烏帽子頭1体と女が1体である。（工藤紘一『いわてオシラサマ探訪』岩手県立博物館 2008・遠野物語研究所『遠野物語96in遠野』講義録 1966）

「馬娘婚姻譚」の話の筋と関わる馬頭型のオシラ神の出現はいつの時代であるかという問題がある。

しかし、7遺跡から出土する7点の木偶は、すべて人頭型である。特に14世紀後半から15世紀中頃



の出土である土井ノ内遺跡のオシラ神の頭部は、人頭を削出し折り烏帽子風の人頭型である。

柳田は「烏帽子頭は最もおくれて馬頭から変化したもののように伝えられているが、果たしてそうであるか否かは、尚比較を重ねてからでないと断言し得ない」（『オシラ神の話』1991）としている。

土井ノ内遺跡出土が現在最古のものであるなら、人頭型のオシラ神が古くから存在したとになり、その後、馬頭型のオシラ神が製作するようになったとも類推される。また、「馬娘婚姻譚」の接合による馬頭を神体とするモチーフの誕生と烏帽子状人頭型の異なる二系統のオシラ神が早期に成立していた可能性も考えられる。遺跡からの出土は1体のみのであるからもう1体の頭部の形態が気になる。いずれにしても14世紀後半～15世紀中頃には、単なる棒状のオシラ神ではなく人頭部を描いたオシラ神が出現していた事実は形態の変化を探る一つの指標となろう。

秋田市東根小屋町遺跡における江戸期の武家屋敷跡から出土した木偶は、オシラ神と類似する。しかし、現況の秋田県のオシラ神信仰の分布は希薄である。それに反し、江戸時代の紀行家菅江真澄の『すすきの湯』（享和3年1803）では「大館市でイタコがオシラさまをほろいで、吉凶を占った」と記録しているし、『雪の出羽路』（文政2年1825）では「横手市大雄村の谷をひだてて交差している桑の木で男女のオシラさまを作る」ということが記されている。また、「烏しら神という鳥型のオシラ神、馬しら神」についても述べ、秋田県大仙市太田野にも『月の出羽路』（文政11年1828）のなかで「姫頭、馬頭、鳥頭」のオシラ神があると記録する。

菅江真澄の記録のなかで特に注目するのは、異形の鳥オシラ神の存在である。鳥オシラ神については、天明6年（1786）『はしわの若葉続』（仮題）のなかで「気仙沼（現宮城県）でオシラ神とオシラさまを使う老女のことを見て、ここでは姫しらという女の頭、むましらという駒の頭、鳥しらには嘴がつけ、頭を綿で包みいろいろな絹を着せたオシラ神」を記録し、さらに寛政8年（1796）『すみかのやま』でも青森県大鰐町早瀬野で馬頭、鶏頭のオシラ神をスケッチしている。

柳田は「鶏頭のオシラ神は馬頭の場合と同じく、ただ漫然と思い付かれたものでなく、鶏・鳥に因んでの説話との関わり」を指摘している。（『大白神考』1951）

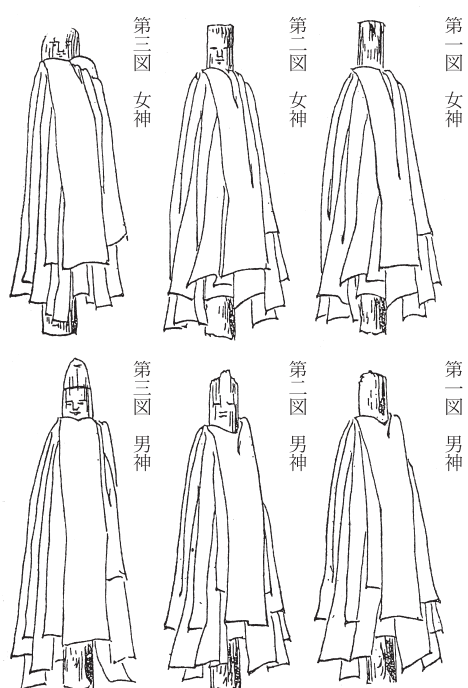
鳥型のオシラ神は、平成2年に刊行した『陸前高田のオシラサマ』（陸前高田市博物館 1990）にも報告があり、東北北半に分布が見える。古態のオシラ神の形態が人頭型そして馬頭型さらに真澄の報告する異形の鳥型も紛れて存在する。さらに特徴的なオシラ神には「合掌姿の僧形型のオシラ神」が青森県、岩手県に分布している。（大湯卓二『東北民俗学研究』第7号 2001・『遠野物語ゼミナール in 遠野』1996）

以上の特徴的なオシラ神の神体については、今後、分布とオシラ神の性格を探りながら、異なる形態を次々に誕生させて行くオシラ神信仰地域の歴史的背景を考慮して、分析する必要があるだろう。

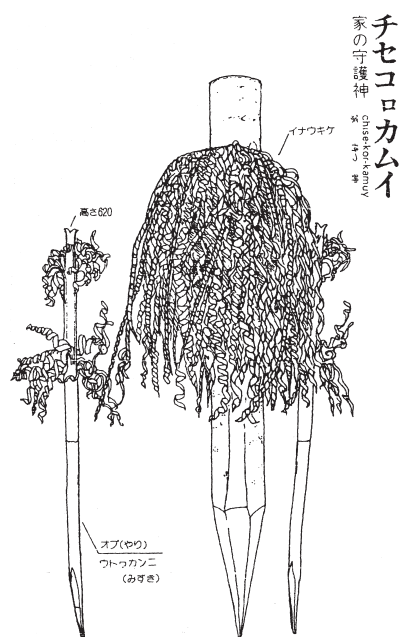
遺跡から出土するオシラ神類似の木偶は、出土年代が想定される新たな資料が期待されることから、古態から推移する神体変化を体系づけることも不可能ではない。

文書資料の乏しいオシラ神研究にとって、伝承資料の分析と共にモノの視点からの情報及び神体変化の系譜を整理することが、これからの古くて新しい課題となろう。

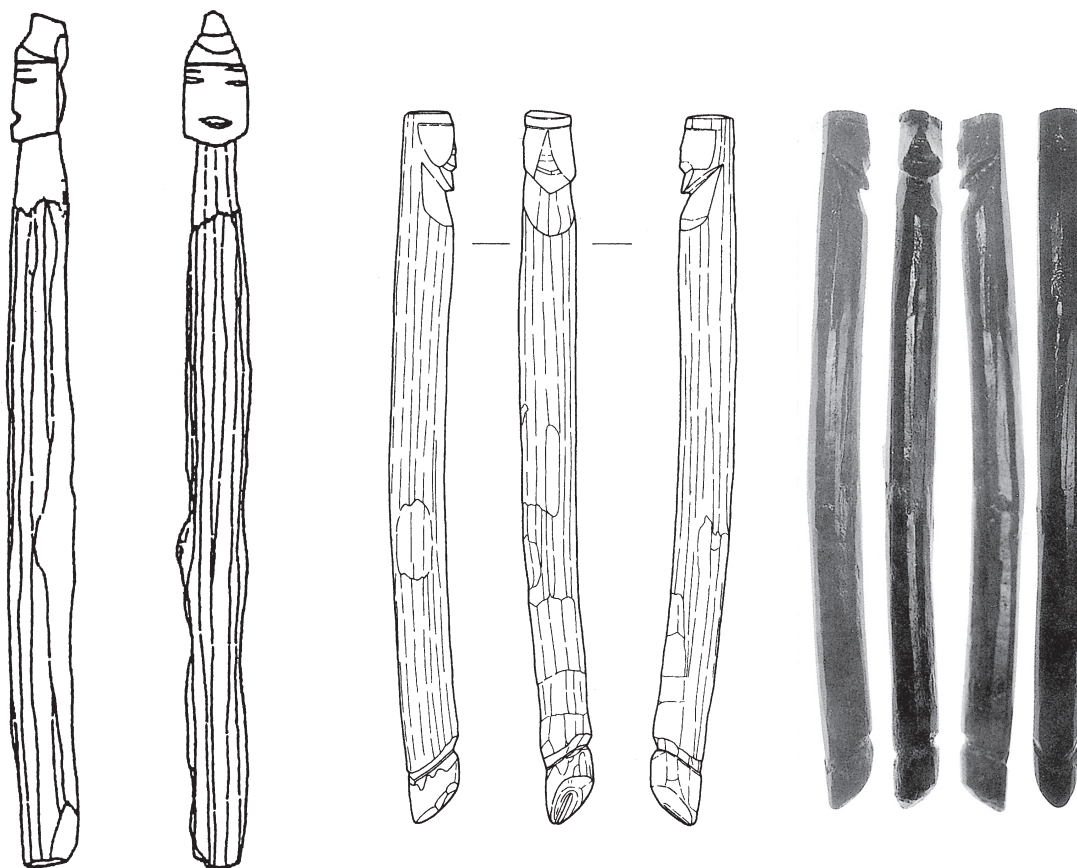
本稿を執筆にあたり、工藤紘一氏、関根達人氏、羽柴直人氏、平田慎文氏、車田敦氏、滝澤克彦氏、斉藤邦典氏、鈴木和子氏、佐藤智生氏からご教示と資料の提供をいただき厚く感謝申し上げます。



第1図 伊能嘉矩「奥州地方に於いて尊信さるゝ  
オシラ神に就きて」(1893)

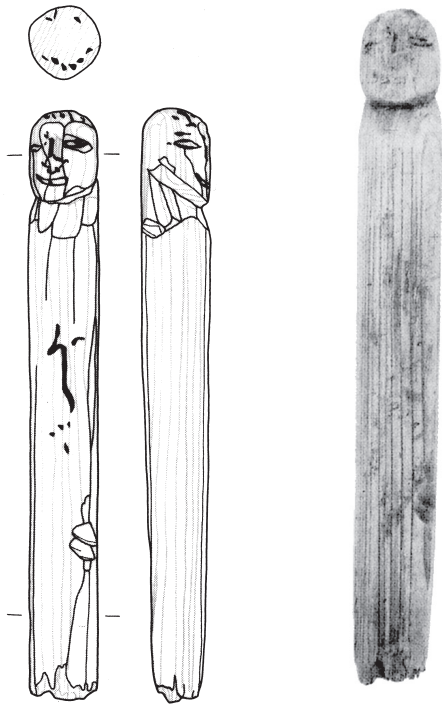


第2図 萱野茂「アイヌの民具」(1978)

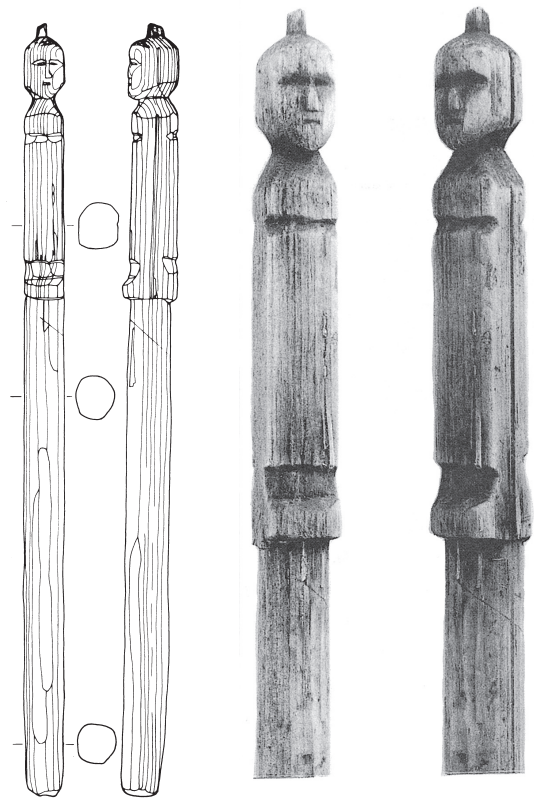


第3図 (1) 土井ノ内遺跡出土  
の棒状人形

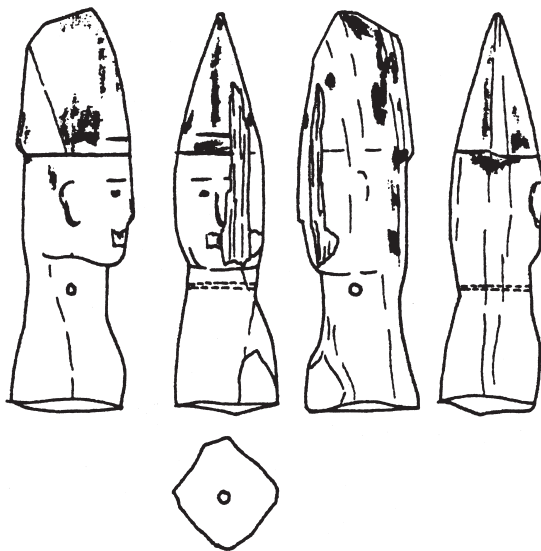
第4図 (2) 三春城下近世追手門前通遺跡群出土の木製人形



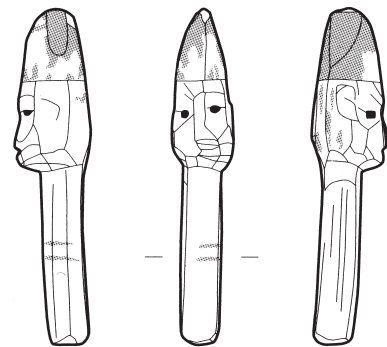
第5図 (3) 東根小屋町遺跡出土の木偶



第6図 (4) 上之国勝山館跡出土の人形



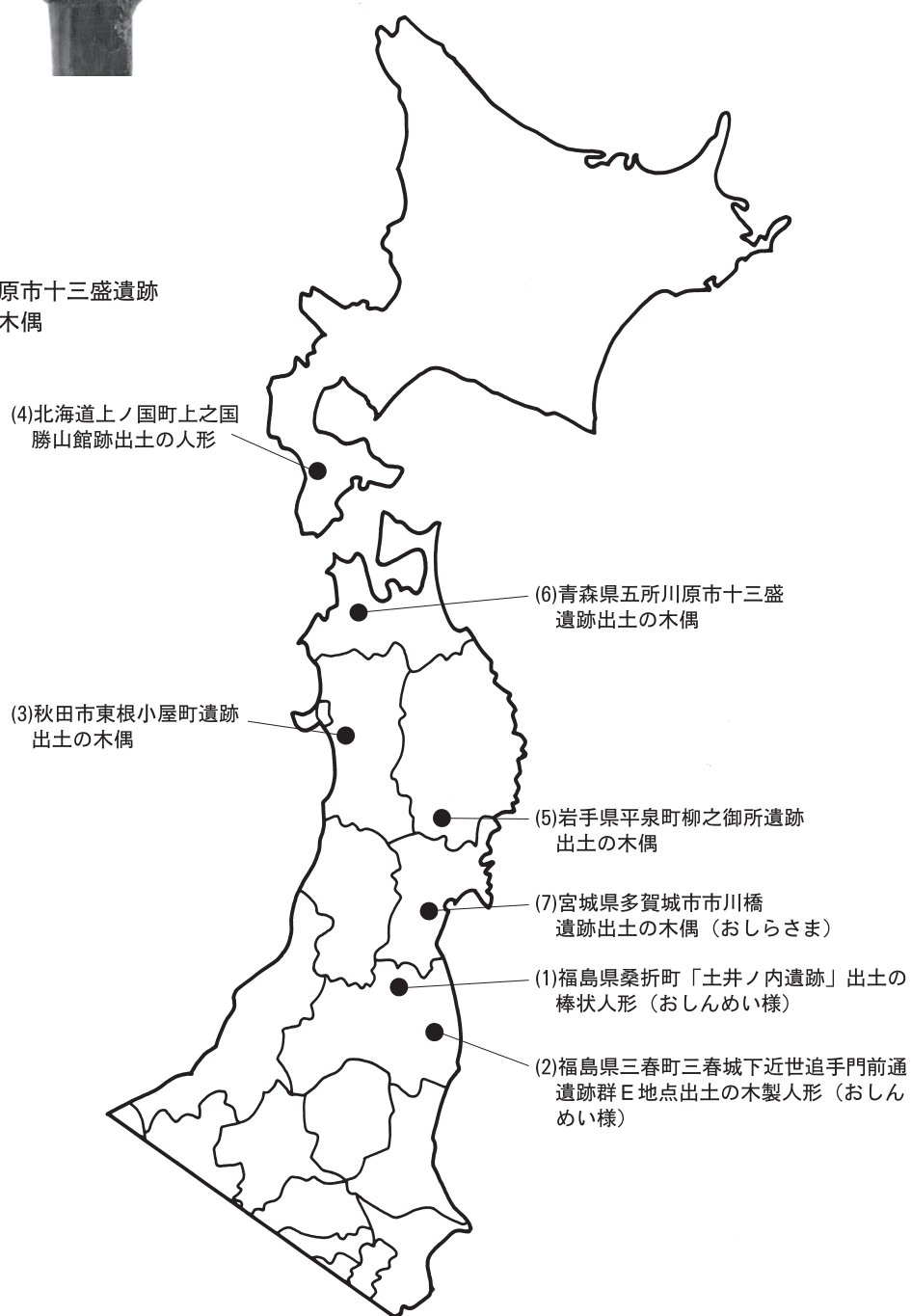
第7図 (5) 柳之御所遺跡出土の木偶



第8図 (7) 市川橋遺跡出土の木偶



写真1 (6) 五所川原市十三盛遺跡  
出土の木偶



第9図 遺跡から出土のオシラ神類似の木偶の分布